

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別郵便掛號第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十八年三月一日発行(第四九卷第三号)

ホトトギス

三月号



俳句随想

二百八十五

汀子

平成十七年が過ぎ去ろうとしている。今年の四月号は創刊千三百号を迎えた。年月にすると百八年と四カ月という気の遠くなるような時間の経過がある。その間、ホトトギスを支えホトトギスを守り育てて来た多くの人がある。子規、漱石、碧梧桐という初期の頃に関わって来られた方々、雑詠欄で活躍されてホトトギスの黄金時代を築いて来られた方々、いまホトトギスの中で活躍して居られる方々、太く力強く花鳥諷詠の道を進むべき俳句の道として研鑽を続けるホトトギス作家たち、そのどれもが欠けては今がなかったに違いない。主宰の虚子、年尾、汀子の努力もその時々々の事情に添ったものがあつた。これから展開していく新しい時代はどの様になつて行くのか、大きな変化をする時代なのかもしれない。いや必ずや変化して行かなければならない新しい時代が有るに違いない。新しい時代を生きて行くために、何が必要かを副主宰の廣太郎と相談しながら企画をして参りたく思い、正しい日本語、自然との共存、感動する心を失わないように心して参り佳い作品を以てホトトギスを育てて行きたい。

旬日記 汀子

平成十七年三月二日 ロイヤル俳優

止んでゐしことに気づきぬ春の雨
咲き満つる日を旬日の椿かな
彼の日より形見となりぬ肥後椿
雲雀野に置きてみたりと能舞台
癒えられしことが何より春めきて

三月五日 芦屋ホトギス会

淋しさをぬぐふ術なし春の雪
雛の間を灯したるより座談会
啓蟄の如く現はれたまへかし

三月六日 関西野分会

炉塞に踏み切ることもなく旅に
無事手術終へしと春の便りかな
蛇穴を出るに知られぬ山の風
春もなほ雪深き地を発たれ来し
あなどりてみてもやつぱり春の風邪

三月六日 下萌旬会

強東風に処すもハンドルさばきかな
あなどりてゐしにはあらず春の風邪
雛飾り集ふ心のありにけり

三月八日 納業倶楽部

雛飾るより部屋の灯の明るさよ
我孤高雛の孤高と通ひけり
弾むときしぶく時あり春の水

水底の石を巻き込み春の水
春の水流るる先のなき如く

三月十一日 工業倶楽部

光るものより置き初むる春の塵
若鮎と見れば見らるる迅さかな
厨には置かぬ春塵心して
拭きてすぐ置く春塵でありにけり
治蟄酒といへど解かざる禁酒かな
群れてゐしことが若鮎なりしかな

三月十二日 関東ホトギス俳句大会前日旬会

里山に置く残雪の景俯瞰
削られてゆく山飾る春の雪

三月十三日 関東ホトギス俳句大会

白梅の古木ならざる香を放つ
皆春を見つけて集ふ秩父かな

三月十五日 有恒倶楽部

暖かき日とてすぐ又あともどり
治蟄酒を禁酒の我にすゝめくれ
春の雪この頃予報よく当る
治蟄酒といふ口実に誘はるる

三月十五日 無名会

この雨に暖かき日々待つばかり
どつと子等集まる日和春田かな
秩父路の山々越えて鳥帰る
何か咲くものを遠目に見し春田
秩父路の春田のつづく車窓かな
秩父路を訪へば誰彼偲ぶ春
その後の消息間はん鳥帰る

三月十六日 夏潮旬会

卒業に贈る言葉を携へて
貝寄風に飛ばされてゐし心かな
ミモザ咲きその他のもの省略す
初花の遅るることも承知して
あたゝかき日となりしより庭親し
今日のためなほ納めずに置く雛
春焔消す客の所望でありにけり

三月二十四日 きさらぎ会

すぐ上る雨の一日となる彼岸
とどのはぬ陽気彼岸の常として
朝の間の野の拡がりに揚雲雀
余寒なほ引く旅予定通りかな

三月二十五日 時雨会

春雷のありしと聞きし目覚かな
霧りしかや長駐車せし車
六甲の今日はずく霧りて
卵とど土筆の旬でありにけり
旬日のあれば春めく日なるべし

三月二十六日 旬会と講演の会

湖の今日は風ぎぬし御開帳
よく乾く海苔干場とて人入れず
滞在の三日目にして春らしく

三月二十七日 野分会

祝ぎの日に向けて春めく心かな
仕事には優先順位梅椿
三月二十八日 アサヒカルチャー
降り出して初花ほどく雨となる
東京の滞在長し初桜

廣太郎句帳

廣太郎

平成十七年三月一日 一水会

いぬふぐり地球の黙を解きにけり
レオナルドダビンチめきて蝮の道

三月三日 蕉心会

なんやわれふつかやいとをすゑたるか

春の雪予報に黙す都心かな
温む水水上バスに剥がされし

蕉像も立子忌といふ目差しに

びつしりと川鶉流して水温む
うららかに川鶉躍つてをりにけり

三月十日 土筆会

魂を蕊に納めて椿落つ

幾万の椿落ちねばならぬかな

三月十二、十三日 関東ホトギス大会

鳥歸る空を大きく開けてあり
寿福寺に人の増え来て彼岸かな
もの芽を確かめ登る女坂
標高といふ雪解の遅速かな

三月二十日 若水会

秩父嶺に魔物めきたる杉の花
温む水舟に凹んでをりにけり
雪解水漕に奏でるアンダンテ

三月十五日 草木瓜会

蟻穴を出づれば人は尚忙し
東京都稲城市に句座暖かし
啓蟄の土やはらかく踏みしめて

三月二十三日 目黒学園句会

ゆるやかな多摩の稜線地虫出づ
土のなき都心を離れ地虫出づ
その中の暖かき目でありにけり

三月十七日 登高会

結局は小さき鉢買ふ苗木市
久々の出会ひ復活祭前夜

三月二十六日 ホトギス社句会

雑詠

廣太郎 選

鷹渡る山はうち伏し海は風ぎ 高知 橋田憲明
 雲の上の白道をゆく渡り鷹 同
 日を置きて月追ひゆける渡り鷹 同
 身に入むや被災一年瞬く間 長岡 安原 葉
 地震の崖崩れしままや秋の雨 同
 目つむれば濃紅葉に焼きつくされむ 同
 顔に泥つけて仕上る案山子かな 箕面 中谷まもる
 角切の勢子にも妻と子のありて 同
 赤い羽根つけて社会に閑はりぬ 同
 新酒酌む日本シリーズは禁句 神戸 山田弘子
 腰抜けの瓢の音色も私らし 同
 瓢の実の中の真闇の無限大 同
 負けん気の子規漱石や文化の日 榎原 稲岡 長
 風騒の集ひしづかに文化の日 同
 人に群れひとりの愁ひ文化の日 同
 カルストの野菊は神の色なりし 福山 竹下陶子
 天心をすこし下りし後の月 同
 向日葵の迷路に声の迷へる子 同

小鳥湧く洗ひ上げたる青空に 龍ヶ崎 今橋真理子
 今朝晴れて天には小鳥地に日ざし 同
 初紅葉なる一本の木の孤独 同
 あかつきは秋めく雲の通る富士 相模原 木村享史
 初月のあやふく白し富士の空 同
 新涼のとまどひ蟻も我もかな 同
 秋天下富士はしづかな山である 熱海 嶋田一步
 コスモスや富士は裾まで見える山 同
 富士駅発富士宮着赤蜻蛉 同
 朝寒の着る服プラスしマイナスし 同
 スカーフの数また増えて冬に入る 同
 落ちる他なくて落ちくる滝なりし 同
 マネキンの案山子を担ぎ畦を来る 東京 坊城俊樹
 菊人形ふくら雀に帯締め 同
 秋蝶の白し花嫁白ければ 同
 新涼を呼ぶひとひらの雲走り 神戸 保田 晃
 山上の秋涼遽かなりしかな 同
 草じらみ払ひ仏母のおん前に 同
 山国の二つ淋しき秋の蝶 同
 冷やかといふ閑けさの満ち来る夜 同
 啄木鳥や山荘の夜の孤独打つ 同
 ひそかなるものに花野と信仰と 熊本 岩岡中正
 虫の闇へと垂直に寝落ちけり 同
 露踏んで露より生まれたる我等 同

雑詠句評（二月号より）

糸瓜忌や阪神愛す一詩人 狭山 大久保白村

小木菟・雅　・弘子
純也・一步・ひさ志
暮潮・比奈夫・昭代
仁義・基子・廣太郎

九十二の乾杯ビール飲めずとも 八子 原 三猿子

或る宴席で乾杯の音頭をとることになった。自分はビールは飲めないのだが、おそろく年長ということで指名されたのである。ビールは飲めなくても、皆と一緒にって雰囲気を感じようという九十二翁の感懐のほどが素直にひびいてくる。

（小木菟）

長寿を祝う誕生日パーティーだろうか。お若い頃はよく飲まれていた方なのかも知れないが、お酒をセーブされている。それでも祝いの席での乾杯には心躍らされている。その場の雰囲気の小道具として「ビール」が効いており、楽しい雰囲気は素直に伝わってくる句である。（廣太郎）

愉快な句に、にんまりである。この一詩人に、思い当たる人が何人かは居るのではあるが、ホトトギスのホームページの「放蕩編集長」でも常々披露なさっている、ホ誌雑詠選者であられることは容易に察しがつく。十一月六日、御堂筋に優勝パレードを見に出かけられたとも聞く。俳句と同じ位にタイガースファンとしての情熱をも燃やす。タイガースファンにとつては堪えられない、時まさにふさわしい一句。もちろん子規が野球の名付け親であることを踏まえてのことであるから、「糸瓜忌や」なのである。阪神タイガースだとわかつて貰えないと困る。

並べて書くのは甚だおこがましいが、斯く言う筆者も、時の人日本郵政の初代社長に内定した西川善文氏も「趣味」は阪神タイガースである。（雅）

平成十七年度のプロ野球で、阪神ファンは正に「天国から地獄へ」という感慨が深かったのではないだろうか。筆者はどうしてもそういう立場からの考えしか持てないが、勝つても負けても、いや負けても負けても応援する。子規と野球の結びつきも相俟って楽しい句になっている。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

江子選

背を伸ばせまなこを上げよ天高し
 鹿見島 西村 数
 風の海日の海コスモス高原は
 同
 秋風も吾も過客や色ケ浜
 神戸 山田弘子
 手の窪に露のしづくの小貝かな
 同
 去来する霧よ心よ横川路へ
 東京 吉田小幸
 秋冷の波が波追ふ湖中句碑
 同
 夕闇に隠れやすきは藤袴
 豊中 瀧 青佳
 秋草に夢のやうなる客ありぬ
 同
 妻遠くなりし今年の月小さく
 神戸 後藤比奈夫
 痰一斗とは耳馴れてゐて寒し
 同
 かく眠りゐる間も紅葉しつつあらん
 熊本 岩岡中正
 座りたる椅子白ければ秋の風
 同
 霧に來て霧の流れをたのしめる
 たつの 浅井青陽子
 年尾忌に参じこころに期するもの
 同
 露けさの朝の寡黙でありにけり
 相模原 木村享史
 虚子生きし露の世に吾も生きてをり
 同
 小倉山抜けければ嵯峨野時雨かな
 榎原 稲岡 長
 日の暮は時雨佳しき日本海
 同

蕉翁に新涼の閑伽奉る
 河内長野 吉年虹二
 湖渡る迅さありけり後の月
 同
 水途切れたるより芦屋川残暑
 東京 稲畑廣太郎
 受付は幼馴染や灯下親し
 同
 色町に老柳二本阿波踊
 徳島 上崎暮潮
 料亭も我も世に古り阿波踊
 同
 遅足に渡る小春の太鼓橋
 福岡 松尾緑富
 太宰府の菊祭てふ賑ひに
 同
 爽やかに托鉢僧の足早に
 東京 坊城俊樹
 天高し托鉢僧の鉦揺れて
 同
 俳磚に日の当りつつ時雨冷
 姫路 桑田青虎
 そこはかとある虚子館の時雨冷
 同
 夜は星と風鈴語り明したる
 福山 竹下陶子
 消えてゆく記憶は追へず青ふくべ
 同
 里山の風運びくる秋祭
 吹田 宮崎 正
 未枯るるものに入り日の濃かりけり
 同
 紫蘇は夷となり摘みごろや旅帰り
 熱海 嶋田摩耶子
 境内に動く彩り七五三
 同

天地有情句評

汀子

夕闇に隠れやすきは藤袴 豊中瀧 青佳

早々と夕べの帳が降りて藤袴の咲く辺りを隠す。

妻遠くなりし今年の月小さく 神戸 後藤比奈夫

亡き妻を恋う作者の目に早々と月が昇ってしまった。

かく眠りある間も紅葉しつつあらん 熊本 岩岡中正

しんしんと迫りくる真夜の冷え、紅葉の色も極めて行く。

年尾忌に参じころに期するもの たつの 浅井青陽子

年尾忌を鎌倉に修し決意を持つ作者。

虚子生きし露の世に吾も生きてをり 相模原 木村享史

虚子も又世の様々な荒波を生きて来た。そして自分も耐えて。

背を伸ばせまなこを上げよ天高し 鹿児島 西村 数

若者よ、しっかりしろとの温かい励まし。

手の窪に露のしづくの小貝かな 神戸 山田弘子

ますほの小貝を手に乗せて芭蕉を偲ぶ旅の作者。

去来する霧よ心よ横川路へ 東京 吉田小幸

さまざま交錯する思い出に霧の去来。